

機能主義言語学入門：言語使用の目的と手段（山本孝夫教授退職記念号）

著者名(日)	高野 秀之
雑誌名	嘉悦大学研究論集
巻	56
号	1
ページ	87-106
発行年	2013-10-25
URL	http://id.nii.ac.jp/1269/00000310/

研究論文

機能主義言語学入門

～言語使用の目的と手段～

An Introduction to Functional Linguistics:

Goal-mean models in language use

高野 秀之

Hideyuki TAKANO

<要約>

本稿は機能主義言語学の入門研究である。ここで言う「機能主義」とは、Saussure が築き上げたヨーロッパ構造主義言語学の伝統における「一つの研究動向」のことを意味している。彼の後継者の業績の中から、特に、言語使用の目的、その目的が果たされる場面、言語使用の場面や状況において発現する意味（即ち、機能）に関心を寄せるものを選び、それらが言語体系の構造を記述するという目的を果たすために、どのような手段（方法）を講じているのかを概観する。

言語学という特定領域の歴史において、対立しているかのようにも見える二つの研究動向（即ち、構造主義と機能主義）がどのように扱われてきたのかを見直すことは、言語学史の研究のみならず、最新の言語理論を理解するうえでも有意義なことである。

本研究が扱う業績は、「コミュニケーション理論」、「場の脈絡という概念」、そして、言語学の主たる目的を意味の研究として定め、「意味はコンテキストの中で機能するという言語観」に限られる。それらはみな、行き過ぎた客観主義への反省に基づいて、「目的－手段」というモデルを共有している。

<キーワード>

構造主義言語学、機能主義言語学、記号論、全体と部分、「目的－手段」のモデル、function、context of situation

1 はじめに

言語学の歴史は、Saussure が哲学的な言語研究の方法を退け、人間の言語に普遍的な原理として「一般言語理論」を構築したことから始まる。記号論との類推に基づいて言語を定義することにより、Saussure は言語を研究対象とすることには意義があり、言語の構造記述を目的とした学問（即ち、「言語学」）の必要性を主張した。言語学を既存の科学に匹敵するものとして自立させ、学問体系の中に組み込んだという功績により、Saussure はヨーロッパ構造主義言語学の始祖と称され、また、現代思想の源流として位置づけられている。

ヨーロッパ構造主義言語学の伝統において、言語は単に構成要素の集合ではなく、個々の要素が相互に関連し合う概念的な（したがって、実体を伴わない）体系である。この体系を前提としてはじめて、個々の要素（即ち、具体事例）に意味が付与されると考えられている。Saussure の後継者たちは諸学派を形成し、それぞれの観点からこの理論的な基盤（或いは、その「原理」）を実証していった。こうした研究動向の一つが、機能主義言語学である。本稿の目的は、この機能主義言語学を入門レベルで捉え直すことにある。

言語学における機能主義と構造主義の関係は、異分野において対立する二つの理論や分析方法としばしば混同され、その結果、言語学においても相反するものであるかのように誤解されることがある。しかし、本稿における機能主義言語学は、ヨーロッパ構造主義言語学の必然的な要請として据えられ、したがって、Saussure の「理論」が導き出した一つの方向性として位置づけられる。この主張の真偽を問うため、彼の後継者による業績¹⁾の中から、特に、言語使用の目的（とりわけ、「通信」や「コミュニケーション」）、その目的が実現する環境の総体としてのコンテキスト（含、発話の背景としての文化、発話の場、発話内容、表現手段）、そして、言語使用の場において発現する社会的・文化的な意味（即ち、慣習化された意味）に関心を寄せるものを抽出し、それらが「言語体系の構造記述」という目的を果たすためにどのような手段（方法）を講じているのかを概観する。

本稿の目的はあくまでも機能主義言語学の入門研究であり、ヨーロッパ構造主義言語学の諸学派において意味に関心を寄せる業績をすべて網羅することではない。したがって、第2章では、プラーク学派のBühler と Jakobson が考案したそれぞれのコミュニケーション理論、ロンドン学派のMalinowski が文化人類学の研究（現地での調査）を通じて発見し、自らの造語で表現した context of situation という概念、そして、その概念を社会学的な視点と融合させることによって、言語学の目的を「意味の叙述」と定めた Firth の言語観に限られる。

第3章は、Saussure の後継者たちが言語学の研究対象を langue から parole へと拡張していった理由を解き明かそうと試みる。Saussure の「二項対立」という理論構築の方法に着目すると、言語体系の構造記述から言語使用の場面における意味（即ち、言語機能）の説明に移行してゆくのは当然の帰結にさえ思えてくる。機能主義言語学は既存の研究動向（即ち、構造主義言語学）に対立するために持ち出されたものではなく、構造主義言語学の想定内のも

のであったという仮説に基づいて、考察を加える。最終章では、それまでの議論を整理し、言語学が進むべき方向を提案することによって研究の展望とする。

2 ヨーロッパ構造主義言語学の業績：Saussure の言語学から派生した機能主義言語学

本章は、Saussure の後継者たちがいくつかの学派を形成し、ヨーロッパ構造主義言語学が言語機能に強い関心を示していった過程をたどる。取り上げられる業績は、プラグ学派の二種類の「コミュニケーション理論」、ロンドン学派の「context of situation という概念」、そして、現代意味論の萌芽期までである。これらはすべて、Saussure (1916) から始まった。

2.1 Saussure の記号論²⁾ 前後

ヨーロッパ構造主義言語学の伝統は、Ferdinand-Mongin de Saussure (1857-1913) が『一般言語学講義 (1916)』³⁾ によって、人間の「対象認識」に関するそれまでの常識に揺さぶりをかけたことに端を発している。Saussure が歴史に登場するまで誰も疑うことのなかった対象認識の方法とは、日常の言語を「曖昧さに満ちた体系」として言語研究の対象から除外し、言語表現の意味は理性によってのみ導き出されるべきものであると考える、論理実証主義に代表される哲学的意味論の方法であった。

…一つの記号は一つの意味しか持たず、一つの意味は一つの記号でしか表現されず、かつ、いくつかの記号の結合全体のもつ意味はそれぞれの記号の意味の和に等しくなるような体系 —— を作り上げ、それに正しい推論を常に保障してくれるような規則を組み合わせることによって、誤った判断が決して出てこないような厳格な学問的手段を人工的に作り上げようとするのである。

(池上 1975, pp.19-20)

論理実証主義的な意味論の方法は、日常言語の曖昧さというものを極限まで排除しようとするため、言語研究者の科学志向を満足させるものとして期待された。しかし、この方法の抛りどころとする実証可能性が障壁となり、期待通りの効果は得られないことが表面化する。

実証可能性というものは真偽値 (真偽の判断に基づいて付与される「価値」) に基づいており、その真偽値は観察可能性 (即ち、直接経験を通じて、認識の主体である人間が対象の存在を実感することができるかどうかの可能性) によって保障されるべき性質のものである。ところが、その対象が存在するという事実を証明することが困難な事象 (例えば、抽象的なことから) だけでなく、それが存在するという事実を確認することでさえほとんど不可能な想像上の生き物や空想でさえ、自らの経験や既知の情報と照合することによって人間は取り込んでしまう。つまり、論理実証主義的な意味論の方法では説明がつかない、人間に固有の

「対象認識のメカニズム」というものが存在するのである。

また、哲学的な意味論の方法は、いかなる認識対象も等しく意味素成⁴⁾に分割することが可能であり、かつ、分割された素成（即ち、「部分」）をたし合わせればもとの形（即ち、「全体」）にまで復元できると主張している⁵⁾。しかし、この主張において想定されているのは、常に一定のやり方で認識の対象を分割し、かつ、分割した対象を寸分の狂いもなく、もとの状態に戻す能力を備えた人間である。「科学志向」に傾倒する言語研究者の満足度を高めるためとは言え、過度に理想化された人間には、もはや、本来の姿（即ち、曖昧で予測不能な、不安定で揺らぎを伴う姿）を見いだすことはできない。万一、すべての人間が認識対象を等しく意味素成に分割し、それらを等しく積み上げることができたとしても、個々の素成がもとの状態に戻る（或いは、分割される前の状態を保つ）という保証はない。

人間に固有の「対象認識のメカニズム」が哲学的な意味論の方法では解明できないということをも明らかにするため、Saussure は記号論に着目し、記号の体系（全体）と具体事例となる個々の記号（部分）との関係を逆転させてしまう。

記号は無秩序に集合体（set）を形成しているのではなく、他の記号との差異性に基づいて価値の体系（system）を成している。この「体系」は、人間が記号を認識し、さらにそれを情報として交換する際、「社会的・文化的な制度（或いは、「慣習」）」として機能する。特定の文化圏を生きる人間が共有する典型的な認識の仕方を制約する制度に対し、「静的で、単一の全体（或いは、総体）」という性質を認めてはじめて、個々の記号はその存在意義を持つと考えた。Saussure の記号論にゲシュタルト（Gestalt⁶⁾）を見てとることができるのは、それが「形式⁷⁾（体系）に先立ち、いかなる実質（具体事例としての記号）も存在しない」という発想に基づいているためである。

概念的な記号の体系との類推に基づいて、Saussure は言語記号の体系（即ち、言語の構造、言語記号の体系、langue）を構想する。記号論の原理を取り込み、言語記号の体系を全体（或いは、制度や慣習、広義の「文法」）として認めることを前提に、その部分である具体事例（即ち、言語記号）は significant になる（即ち、意味が付与される）とした。個々の言語記号は表現（能記：signifiant）と内容（所記：signifié）から成り、両者は一枚のコインの表と裏のように、不可分にして相互依存の関係にあるとされる。個々の言語記号が有機的に機能するのは、それぞれが言語体系の中にあるからこそであると据えられている。

また、実際の言語使用というものは、言語記号が無作為に選ばれ、無秩序に線状を成しているのではない。ほとんどのヨーロッパ言語の場合、垂直方向には言語記号が音形・語形・意味に基づいて連合の体系（paradigmatic system）を形成し、水平方向には（狭義の）文法に基づいて統合の構造（syntagmatic structure）を成している。したがって、実際の言語使用によって実現する社会的・文化的な意味というものは、連合関係にある言語記号の中から最も適した選択がなされ、それらが統合関係を形成するように最適な順序に配列され、その結果、言語記号が実質を伴い、parole として顕現したものであると捉えることができる⁸⁾。

Saussure は、個別的な要素が多いことを理由に、言語学の研究対象から parole を除外し、langue の構造を記述することに限定してしまう。しかし、langue は概念的な実質を伴わない体系なので、使用を通じて人間が感知することのできる parole に着手しなければ、langue の構造記述は原理的に不可能なのである。そこで、Saussure の後継者たちは、Saussure 自身が設計したさまざまな「二項対立」という関係に注目し、ヨーロッパ構造主義言語学の伝統を継承する（即ち、「langue の構造を記述する」という目的（Goal）を果たすため、個々の具体事例としての言語記号（即ち、parole）の意味にまで研究領域を拡張させるという手段・方法（Mean）を選んだ。Saussure が理論構築の過程において退けた行動主義の「刺激－反応」モデルではなく、言語理論の目的を果たす方法として「目的－手段」のモデルで人間の対象認識を捉えているのである。これもまた、機能主義言語学の一つの特徴⁹⁾であると言えよう。

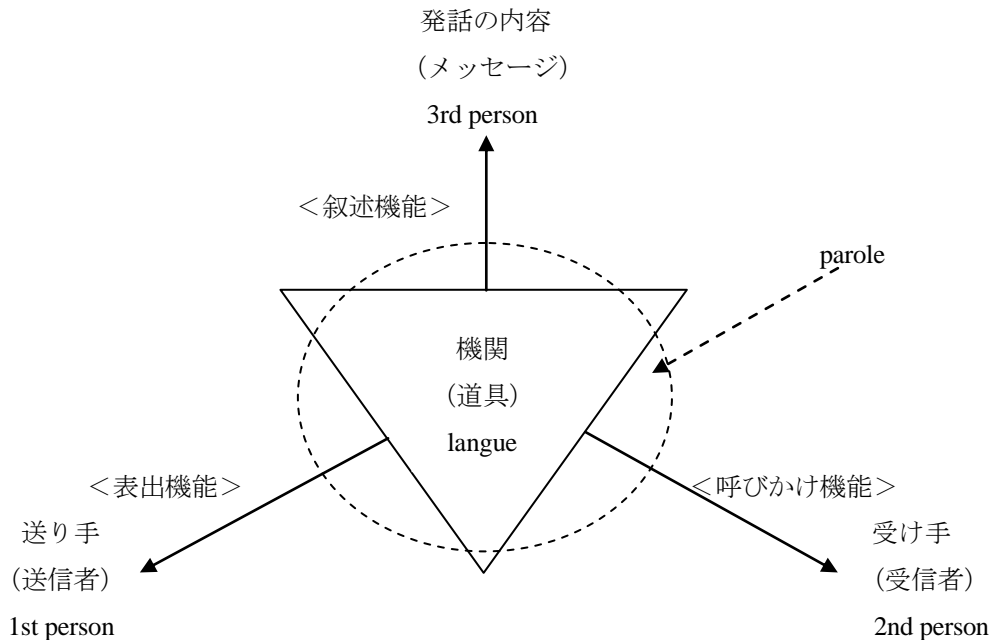
2.2 プラーグ学派の業績

言語使用の主たる目的は何かという質問に対し、最も一般的な答えとして期待されるのは人間相互の「通信」や「情報伝達」（即ち、コミュニケーション）である。この目的を果たすため、Saussure の後継者は情報伝達の仕組みに着目し、その仕組みの中でどのように言語記号は構造化され、意味を担っているのかという問題に取り組んでいった。しかし、彼らは必ずしも同じ程度に Saussure の言語観を理解し、それを踏襲していたわけではない。ヨーロッパ構造主義言語学の伝統は多様性を容認していたため、Saussure が排除した合目的な言語道具観を継承する学派が存在していたという事実も注目に値する。

2.2.1 Bühler のコミュニケーション理論：言語機能論

オーストリア人の Karl Bühler (1879-1963) は、実際の言語使用の場面に着目し、langue はコミュニケーションを成立させる三要素（即ち、話し手、聞き手、伝達内容）に対し、それぞれ異なる機能を付与する機関（organon）であると考えた。下の図1は、「言語機能論」に基づいて描かれた、Bühler の基本的なコミュニケーションモデルである。

下向きの三角形は langue で、各辺がコミュニケーションの三要素と面していることで、langue と各要素とが関連していることを表している。その三角形と重なり、点線で描かれた円は、実際の言語活動を通じて実質を伴った記号（parole）を表している。三角形から三要素まで伸びている実線つきの矢印は、話し手に「（心情の）表出（expression）」、聞き手には「呼びかけ（appeal）」、そして、発話の内容には「叙述（representation）」という機能が、それぞれ作用していることを表している。



(興津 1976, pp.95-96, pp.203-204、Jakobson 1987, p.68 より)

図1 Bühlerの基本的なコミュニケーションモデル

三角形の先端が円から突出しているのは、実際の音声というものがすべて聞き漏らさずに伝わっているわけではなく、聞き手が感覚（即ち、器官の能力）で補修しながら聴いているということを表している。また、円が三角形の各辺より大きく膨らんでいる理由は、langueとして使われたことがない音声というものが存在し得る（或いは、すべての音声はlangueに組み込まれているわけではない）ということを表している（興津 1976, pp.203-204）。

例えば、「日が昇る」という自然現象の描写（厳密には、現象文）も、話し手にとっては「新たな始まりの予感」が心情として表出したことを表し、聞き手には「（未来に向かって）進むべき時が来た」という呼びかけとして受け取られ、発話内容は話し手に何らかの動機を与えた事態（或いは経験）ということになる。

Bühlerの「言語機関論」は、特定の発話には（少なくとも）三通りに解釈される可能性があることを示唆している。第一の解釈は、話し手がある事態の経験者となり、かつ、解釈者として言語化した意味である。第二は、話し手の発話を耳にした聞き手が解釈者となって到達した意味、そして、最後はその場にいなかった（したがって、三人称で表される）人々にも伝わる意味である。このように、一つの発話に複数の解釈が可能なのは、程度の差こそあれ人間が事態を主観的に解釈しているからであり、人間が言語を使う限り、この事実は当然の帰結となる¹⁰⁾。しかし、Bühlerには、伝統的な意味論が拠りどころとする構造的・階層的な論理関係（例えば、「同義－反意」や「包含－包摂」）によって言語の客観性が担保でき

るとは思えなかった。そこで、Bühler は、言語使用の場面における三要素にそれぞれの機能を付与する「機関」の役割として、Saussure の *langue* を関連づけたのではないか。

Saussure の *langue* を「言語機関論」に取り込んだのは、Bühler が共時的な言語研究の方法を全面的に受け入れたためであると結論づけるのは早計である。

次章でも触れることであるが、Saussure は言語学を既存の科学と遜色のないものに高めるため、*langue* を閉じた体系にするという代償を払って、言語学の研究対象に安定性(或いは、「不変性」)を確保した。この、*langue* に込められた「静的で、単一」という性質を「機関」に取り込むことにより、Bühler は「言語機関論」に基づいたコミュニケーションモデルをより客観的なものにしようと考えたのである。

…that Bühler is not attempting to explain the nature of the linguistic system in functional terms. He is using language to investigate something else. His interest is, if you like, psycholinguistics; …I would consider both these views entirely valid in terms of their own purposes.

(Halliday 1978, p.48) ¹¹⁾

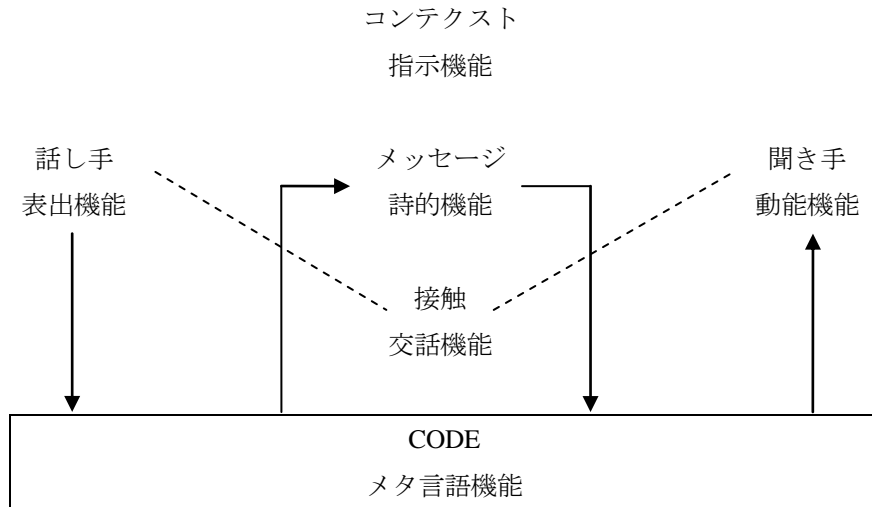
Bühler のコミュニケーションモデルは、実際の言語使用の場面において、その内容以上の機能がもたらされるという事実を明らかにした。しかし、彼のモデルは Saussure の記号論に基づく言語観を忠実に継承したというより、言語の問題以外の目的を果たすため(例えば、心理学的な興味・関心から、発話と機能の間に因果関係があるということを実証する目的で)、*langue* と *parole* を取り込んだと考えることもできるということを見落としてはならない。

2.2.2 Jakobson のコミュニケーション理論：日常言語の研究

ロシア人の Roman Jakobson (1896-1982) は、Bühler の三要素三機能に対し、六要素六機能から成るモデルを提案している。

情報の発信者に焦点を当てた「(感情)表出機能 (emotive function)」が話し手の感情の動きを表現しようとするのに対し、受信者への働きかけに焦点を当てた「動能機能 (conative function)」は、命令形や呼格 ¹²⁾ に見られる作用のことである。実際の言語活動である発話の「場面(或いは、コンテキスト)」には、伝達内容を示す「指示機能 (referential function)」というものが結びつけられる。これは、発話の場面でのみ伝達内容(或いは、指示対象)は明らかにされ、コンテキストが無ければ指示機能が果たされないということを表している。

話し手と聞き手とが点線で結ばれている「交話機能 (phatic function)」は、相互に自分と相手が「正しくつながっている」ことを確かめようとする発話行為に現れる。その典型的な例として、‘Are you listening?’ や ‘Um-hum!’などを挙げるができる。



(Jakobson 1987, pp.65-71 より)

図2 Jakobsonのコミュニケーションモデル

発話の焦点が言語コード（即ち、社会的・文化的な「制度」、慣習の「総体」：langue）自体に向けられた機能が「メタ言語機能（metalingual function）」であり、これは、聞き手が話し手のコードを確認するのに用いられる¹³⁾。それに対し、発話の焦点がメッセージ自体に向けられ、表現をより豊かにするための機能は「詩的機能（poetic function）」である。この機能は文学作品の創作に限られたものではなく、日常的な言語使用の過程において何らかの目的が与えられ、その目的を果たすために言語のさまざまなレベル（即ち、音、語、文、テクスト）に工夫が凝らされ、その結果、発現する。この機能は、言語の生産性や創造性という特徴を反映している。

(1) Beans Means Heinz.

(2) So-fa, so good!

例文(1)は、いくつかの音声的なパターンが効果を生んでいる。先行する二つの語の間には脚韻 (/i:nz/) にも似た繰り返し形成され、/ainz/という音によってそれが断ち切られる。また、主語の複数形語尾である[s]と、それを三人称単数形で受けることによって手に取った缶詰に対応する述語動詞の語尾[s]が繰り返す音 (/z/) も、Heinzの語尾にある子音 (/ts/) によって妨げられる。さらに、先行する二つの語の間で連続する中間母音 (/i:/) も、Heinzの中間母音 (/ai/) によって期待が裏切られる。このように pattern-making と pattern-breaking によって、Heinz という語は注目され、そこに「宣伝・広告の効果」が生じるのである。

例文(2)は、印字の工夫（或いは、表記法）により、慣習的な表現（‘so far, so good’）の音と指示対象（sofa）の意味が関連づけられている。その結果、文字通り、意味のレベルにおい

て「宣伝・広告の効果」が創り出されているのである。

Jakobson のコミュニケーションモデルには、話し手から聞き手に向けてメッセージが伝達されているということだけが図式化されているようにも見受けられる。しかし、そこには、「静的で、単一の全体」としての言語コードがコミュニケーションを実現させているのではなく、包括的なコードが互いに連結し合う別の下位コードとともに構造化され、体系を成しているということが含意されている。

No doubt, for any speech community, for any speaker, there exists a unity of language, but this over-all code represents a system of interconnected subcodes; every language encompasses several concurrent patterns, each characterized by different functions.

(Jakobson 1987, p.65)

どの言語を取り上げても、それが用いられている地域ごとに音、語彙、文法の違いがある(服部 編 1978, p.60)。また、特定の言語の話者の間にも、性差、年齢差、地域差、社会的役割の差がある。さらに、言語使用の「時と場所と場合」により、一人の話者が異なる言語コードを使い分けることもある。多種多様な違いの中でも人間のコミュニケーションが成立しているという事実から、メッセージと言語コードとは一対一の関係で対応しているのではなく、むしろ、複数の異なる言語コードを持つ話し手と聞き手とが、相互に協力し合いつつ、コミュニケーションを成立させているという方がより妥当な捉え方であろう。話し手と聞き手とが相互に役割を交代させながら、コミュニケーションを果たすうえで最も効率のよいコード選択を行っていると考えべきなのである。

話し手と聞き手との間で言語コードの一致がほとんど起こらないにもかかわらず、なぜ、人間のコミュニケーションは成立するのであろうか。この疑問に対し、日常的な言語使用の過程において、そこに関与する人間相互の協力が関連していると Jakobson は指摘する。

…要するに、問題の共通(言)語が、同一民族の諸方言 *parlers* を結ぼうとする方言間言語 *langue interdialectale* であろうと、民族間交易に資する混合言語 *langue mixte* であろうと、それはどうでもよいことである。「相手」のように話そうという志向は母語の境界に制御されない。

(服部 編 1986, pp.42-43、カッコは筆者による)

また、いかなる言語使用も、特定の(即ち、単一の)機能を果たすために行われているのではない。Jakobson は、ほとんどの場合には、コンテキストに付随する「指示機能」、或いは、メッセージに付随する「詩的機能」が他の機能に対して支配的(*dominant*)に作用しつつ、他の機能と連動していると主張する。

Although we distinguish six basic aspects of language, we could, however, hardly find verbal messages that would fulfill only one function. The diversity lies not in a monopoly of some one of these several functions but in a different hierarchical order of functions.

(Jakobson 1987, p.66)

Jakobson のコミュニケーションモデルにおいて、単一の *langue* が各要素に付随する機能に作用することで会話が成立しているのではなく、話し手と聞き手とが互いの役割を交換することによって、相手が自分とは異なるコードで話しているということを前提に、その会話の成立にとって最適なコードを選択するために協働していると考えられる¹⁴⁾。また、いくつかの重要な機能が中心的な役割を果たすとき、常に六つの機能が同じように作用しているというわけではない。ある特定の機能が中心的な役割を果たしている間、その他の機能は一時的に背景化している。そして、別の機能が支配的な役割を果たしているときには、その他の機能が水面下で作用している。

複雑な階層構造（或いは、多重構造）を成す言語体系（*langue*）の中、実際の言語使用を通じて発現する言語機能は前景化と背景化を繰り返し、さまざまに組み合わせられて、多様な状況に対応している。言語の機能のダイナミックな相互作用を日常的な言語使用の中で捉えようとするれば、人間のコミュニケーションというものはそれ自体が一つの全体であるとともに、部分でもあるということがわかる。

2.3 ロンドン学派の業績

ヨーロッパ構造主義言語学の一学派でありながら、Saussure の記号論と一線を画している（時には、批判的でさえある）学派が存在する。それが、ロンドン学派である。彼らは文化人類学（文字を持たない言語を話す人々に密着し、彼らとの生活を通じて現地の文化全般を研究する学問: *cultural anthropology*）の研究から導き出された「*context of situation*（場の脈絡）」という概念を共有し、それぞれの言語記号は特定のコンテキスト（*context*）の中に置かれることによって「社会的・文化的な意味（即ち、機能）」が実現すると考えた。したがって、言語記号の構造化というものは、その機能を果たすための手段であると捉えることができる。

2.3.1 Malinowski の場の脈絡

ポーランド生まれの Bronislaw Kasper Malinowski (1884-1942) は、南太平洋にある Trobriand 諸島において現地調査を行っていた。調査を開始した当初、島民と Kiriwinian という言語で交流することに問題を感じていなかった。しかし、彼らが話した内容（即ち、「意味」）を正しく理解し、それを英語で表現する（即ち、翻訳する）過程において、Malinowski は人類学者として、その困難を痛感させられる。

In the structure of sentences, an extreme simplicity hides a good deal of expressiveness, often achieved by means of position and context. ... the use of metaphor, the beginnings of abstraction, of generalization and a vagueness associated with extreme concreteness of expression —— all these features baffle any attempt at a simple and direct translation.

(Malinowski 1923, p.300)

Malinowski は、単純な構造の文が意味のわかる単語でできていたとしても、その言語表現には特別な感情的色彩 (a specific emotional tinges) があるので、民族的な心理の背景と対照させなければ十分には理解できないと指摘する。

Instead of translating, of inserting simply an English word of a native one, we are faced by a long and not altogether simple process of describing wide fields of custom, of social psychology and of tribal organization which correspond to one term or another.

(ibid, pp.301-302)

一例として、Malinowski が Kiriwinian を英訳し、その解釈がいかに困難なものであるかを紹介しているので、その日本語訳を試みる。

Trobriand	:	<i>Tasakaulo</i>	<i>kaymatama</i>	<i>yakida;</i>
English	:	We run	front-wood	ourselves;
	:	<i>tawoulo</i>	<i>ovanu;</i>	
	:	we paddle	in place;	
	:	<i>tasivila</i>	<i>tagine</i>	<i>soda;</i>
	:	we turn	we see	companion ours;
	:	<i>isakaulo</i>	<i>ka'u'uya</i>	
	:	he runs	rear-wood	
	:	<i>oluvieki</i>	<i>similaveta</i>	<i>Pilolu</i>
	:	behind	their sea-arm	Pilolu

(ibid, pp.300-301 より)

数隻のカヌーが競い合いながら海洋貿易の遠征に加わる様子を表しているという事実から、次のように解釈してみたい。

私（たち）の乗ったカヌーは先頭を走り、
目的の場所に到着した。
振り返ると、まだ仲間たちは私たちより後方を進んでいた。
彼（ら）の乗ったカヌーは（私たちより）後方にあり、
さらに後方にはピロル海に浮かぶ岩礁が目に入った。

（筆者による日本語訳）

生活の糧となる海洋貿易を行うため、人々はカヌーに分乗し、それぞれ、目的地までの道のりを競い合って進む。満足のいく結果を手にした者たちは、その状況を独特の比喩を織り交ぜ、自信と自慢の感情を包み隠さず表現している。

このように、文化の異なる人々が話している内容を理解するためには、その人たちの生活圏内で共有されている行動の規範（即ち、文化や風習）を念頭に置いたうえで、その発話が起こった場面に臨場することで、本来の意味に到達することができる。この事実を包括的に言い表すため、Malinowskiは「context of situation」というフレーズを自ら造り、意味を理解する過程において、どれだけ「場の脈略」が重要であるかを主張している。

He found that to understand the meaning of what was said, it was necessary to possess some knowledge of the cultural characteristics of Trobriand society, as reflected in the context of situation in which particular types of utterances were typically produced, and which were themselves regarded as embedded in the context of culture.

（Butler 1985, p.4、下線は筆者による）

Malinowski (1923)によると、コミュニケーションが成立するという事は、ある発話が特定の場面において文化的・社会的な意味をもった（即ち、「機能した」）ということまで含意している。したがって、発話の場面において、あるメッセージがその目的を果たしたということの意味する。この目的を充足させるものが、「場の脈略」という概念である。

Up to that time, the word 'context' in English had meant 'co-text'; that is to say, the words and the sentences before and after the particular sentence that one was looking at. Malinowski needed a term that expressed the total environment, including the verbal environment, but also including the situation in which the text was uttered. ... By context of situation, he meant the environment of the text.

（Halliday and Hassan 1989, p.6）

Halliday and Hassan (ibid) は、この context of situation が更に二つの用途に対応していると指摘する。一つ目の用途が明らかになったのは、漁を終えた島民たちがカヌーで帰るとき、浜に立つ者たちと頻りに言葉を交わし合っている様子に遭遇した時のことであった。漁を生業とする島民にとってカヌーは貴重なものであり、それを頻りに座礁させるわけにはいかない。そのため、浜にいる者たちが岩や珊瑚礁の位置を洋上の相手に伝え、最短距離で戻ってこられるように誘導していた。このように、即目的で実用性の極めて高い言語使用は、「active な意味での context of situation」である。

…Malinowski observed many occasions when in the evenings the members of the group would gather around and listen to stories. Like most narratives, these stories were not related directly to the immediate situation in which they were told. As far as the subject-matter was concerned, it was irrelevant whether they were told in the morning or in the evening, outside or inside, or what the particular surroundings were. The context in one sense was created by the stories themselves.

(ibid, p.7)

もう一方は、時間や空間の制限もない物語が語られるとき、そのこと自体が場面となって機能するという例である。Halliday and Hassan は、このタイプの用途を「narrative の context of situation」という。

Malinowski にとって言語は「思考の現れ」ではなく、「行動の様式（或いは、社会生活における「行為」）」として成立するものであった。そのため、文明化が進んだ国々の言語の理解には context of situation という概念が通じないものであると考えた。しかし、後年、特定の場面において即目的に用いられる言語だけでなく、抽象的・理論的に使用される言語も、身体的な経験に基づいているという結論に達した。

Malinowski は民俗（誌）学者であり、言語学者ではなかったため、言語理論を構築すること自体には関心を示さなかった。Context of situation という概念を言語のすべてのレベルに応用するには、ロンドン大学における彼の若き同僚、Firth の登場を待たなければならない。

2.3.2 Firth の意味論

イギリス Yorkshire 出身の John Rupert Firth (1890-1960) は、「特定の地域で使われている言語の意味をよく理解するためには、それが使われている社会的な場面と言葉とを引き離してはいけない。そして、発話の意味は、それが交わされる場面において明らかにされるのだ」ということを、Malinowski の業績に学んだ。言葉が交わされる場面で発現する機能こそ、Firth の言語観の中心を成す「意味の問題」ということになる。

Malinowski は context of situation (場の脈絡) という概念を、話し手の周囲にある事情や、

そこで起こった事件、生活、さらに、「文化の型までを包含するもの」として捉えていた。それに対し、Firthは「場の脈絡」という概念をすべての言語のレベル（例えば、音、語、文法、テキスト）に取り込むことにより、会話の具体的な内容やそれにかかわる人間（及び、相互関係や社会的な役割）、そしてその発話に関連する諸特性を抽出しようとした。

…Firth found that Malinowski's conception of the context of situation was not quite adequate for the purpose of a linguistic theory, because it was not yet general enough.

(Halliday and Hassan 1989, p.8)

Halliday and Hassanが指摘するように、FirthはMalinowskiの「context of situation」をただ単に継承するのではなく、一般言語理論の一部として実際の言語使用（或いは、言語活動）を研究するための「枠組み」にしようとして試みている。それをまとめたものが、下の表1である。

表1 Firthによる「意味理解」のモデル

1	会話の参加者	社会学で言うところの、参加者の地位や社会的役割
2	参加者の活動	言語的・非言語的活動
3	その状況に関連する特徴	周辺にあるものや、そこで起こっていること
4	言語使用による効果	会話の場で起こった変化、結論

(Halliday and Hassan 1989, p. 8 より)

1の「会話の参加者」に関して言えば、話し手と聞き手の具体的な名前より、年齢、性別、職業、それぞれの性格の方が、両者の関係形成に対してより重要な要因になるということがわかる。また、2の「参加者の活動」に注目すると、話し手と聞き手による言語活動が実現するとき、その媒体が話し言葉なのか書き言葉なのか（或いは、手話なのか）が言語記号の構造化という問題に影響するということが予測できる。さらに、3の会話が実際に起こっている環境、4でその会話の結果に注意を向けると、ある経験を通じて話し手と聞き手とが必ずしも同じ理解を示すとは限らないという事実が明らかになる。

Firthは、社会学の視点から、人間がある状況の中で言語を使用すると、その状況において最適な結果が導き出されているという点に注目し、その事実に言語の本質を見出そうとした。言葉の意味（ここでは、具体的な表現がもたらす意味）をその表現自体に求めるのではなく、使用された環境の中で言語を観察し、一連の言語活動が有意義であったことを記述するための証拠にしようとしたのである。そこに発現する意味を理解する上で、言語の形式面と内容

面とを分けなかったという点で Firth は Saussure から最も遠い関係にあったが、parole の文化的・社会的な意味理解（或いは、言語機能の説明）へ言語学の興味・関心を向けさせたという点で、最も機能主義的であったと言えよう。Firth の提示した「意味理解のモデル」は後に Halliday に引き継がれることになるが、その伝統がヨーロッパ機能主義言語学として結実するのは 1980 年代になってからのことである。

3 考 察

Saussure の教え子たちは彼の講義を受けた時にとったノートをまとめ、それを Saussure の死後、『一般言語学講義』（1916）として出版した。その中で、Saussure は、記号論からの類推に基づいて言語記号の体系（即ち、langue）を想定し、その構造を記述することこそが言語研究の対象であると規定した。永きに渡り「哲学的な思弁の道具」に過ぎなかった言語研究は分科の学（即ち、科学）として自立し、ここにヨーロッパ構造主義言語学が誕生する。

しかし、Saussure の言語観を程度の差こそあれ継承する言語学者は、概念的な言語記号の体系である langue の構造を記述するためには、実際の言語使用の場面において構造化され、その結果、実質を伴った parole にまでその研究対象を拡張しなければならないということに気づかされる。Saussure が定めた言語学の研究対象を彼の後継者が拡張させたことの意味はどこにあるのか、そして、ヨーロッパ構造主義言語学の伝統はどうやってそこに整合性を見出そうとするのか。

研究対象の広がりや意味するものを徹底的に探求するならば、Saussure の後継者たちが彼の記号論を自由に解釈（或いは、必要に迫られて応用）したことにより、Saussure にとっては必ずしも望ましいとは言えない結果をもたらされた結論づけることもできる。しかし、Saussure が「部分より全体」を、或いは、「実質より形式（体系）」を優先していたように、研究対象の拡張という問題そのものを言語学の問題にとどめるのではなく、記号論の問題として捉え直すことにより、より広くに受け入れられる結論を導き出すことができるのではなからうか。

Saussure の記号論では、全体としての langue に対しても部分としての signe に対しても、一度として実質を認めていない。Langue はあくまでも概念的な体系であり、文化的・社会的慣習の総体に過ぎず、その構成要素となる signe も概念的な表現と内容から成る部分であり、実際の言語使用（発話）の場面において構造化されるまで、決して実質を伴うことはない。この原理（或いは、「原則」）が意味するものは、signifiant と signifié を結びつけるにしても、個別の具体事例としての言語記号を誰にでも感知できるレベルにまで構造化するにしても、未分化の全体から何らかの意味にたどり着くにしても、その実現には人間の存在が必要であり、人間の存在を前提として初めて先の「原理」は成立するということである。

理論構築の段階で Saussure は parole を言語学の研究対象から除外してしまい、その結果、

言語記号の解釈者という項を立てていない。しかし、そこには少なくとも二つの理由が考えられる。第一の理由は、言語の本質的な特徴は、時間の経過とともに変化する言語の形式的・意味的な側面を記録していたのでは見出せないと考えたためである。Saussure は時間を静止させ、言語体系を閉じたものに限定することによって、行き過ぎた進化論に対する警鐘を鳴らし、比較言語学に代表されるような通時的研究から、共時的研究に言語研究を軌道修正したのである。そして、langue の構造記述を研究対象として定めることによって、言語学を分科の学として位置づけることを優先させたのである。第二の理由は、既存の科学に倣い、Saussure は研究対象である langue の客観性を保証するため、文字通り曖昧さに満ちた解釈者（即ち、人間）との決別を果たす必要があったためである。言語研究者の「科学志向性」と、「人間の対象認識」という目的の間で、Saussure がどれだけ迷ったのかは想像に難くない。

確かに、人間は過ちを犯す。自然科学の研究対象のように一定状態を保持し続けることや、法則的な（従って、予測可能な）運動を寸分の狂いもなく正確に繰り返すことなどできない。しかし、過去の経験を照合することによって形の無いものに形を与え（即ち、メタファー的転用による概念化）、相互理解と協力によって他者との関係を構築し、社会的な規範を形成しつつ、その規範によって行動を制御されてゆくことこそ、人間の本質的な姿なのである。繰り返しを恐れずに言えば、人間は langue と signe から隔絶された生活を営むことはできず、同時に、人間の存在を完全に否定した状況において、langue を優先させることや、言語記号に実質を伴わせることもできない。

そこで、Saussure は、芸術的な理論構築を行う。始めに、Saussure は「科学志向性」を前景化させることにより、言語学を分科の学とすることを優先させる。その後、以下のような「二項対立」を設計し、言語記号の解釈者という項を背景化させるのである。

Saussure は、signifiant—signifié、paradigmatic relation—syntagmatic relation、langue—parole という二項関係の間には、不可分にして相互依存の関係が成立していると主張する。この原理に基づいて言語記号の体系（langue）を捉え直すと、その本質はただ単に曖昧さに満ちた体系ではなく、多義的（polysemic）、多機能的（multifunctional）、重層構造的（multilayered）という「潜在的な特徴」に支えられているという事実が浮き彫りになる。Saussure の後継者たちが、ヨーロッパ構造主義言語学の伝統（即ち、langue の構造を記述すること）を継承するため、言語使用によって実現される言語記号（即ち、parole）の機能にまで研究の対象を拡張させたのは、必然的な要請だったのではなからうか。

注目すべきは、Saussure が対立させた二項関係は、どれも二律背反に基づいた二者択一（即ち、「A or B」）ではなく、「A or B or Both¹⁴⁾」という解釈を可能にしているという点である。この「Both¹⁴⁾」という表記は、単に「両者」のことではない。Langue の制約の下で言語記号を構造化させ、それらの記号を使ってコミュニケーションを成立させることによって、使用されたすべての言語記号の総和以上の意味（即ち、機能）が創出されるということを示唆している¹⁵⁾。

4 終わりに

今回の研究を通じて、構造主義言語学と機能主義言語学は対立の関係ではなく、研究の基軸を *langue* の構造記述に置くか、と *parole* の意味／機能分析に置くかの違いに過ぎないとの結論を導き出すことができた。また、研究者自身による主観的な選択によっては、両極のどちらか一方に基軸を設定するほかにも、両極の中間に基軸を置いて、どちらの極にも傾くという動向も可能であるということを示すことができた。

Saussure がヨーロッパ構造主義言語学の理論基盤を構築する過程において設計した数々の二項対立は、どれも不可分にして相互依存の関係にあり、したがって、一方への傾きは必ずもう一方にも作用するという「原理」として据え直された。両者の優劣を相互批判によって決するよりも、むしろ、言語の本質をその多義性・両義性・多機能性に求めることの方が、より建設的な議論を招くことになるであろう。そして、言語の線状性や図と地の反転からも予測できるように、人間は *langue* と *parole* を同時に扱うことができないように、*langue* と *parole* のどちらか一方だけを扱うこともできない。この事実は、注目に値するであろう。

Saussure に始まるヨーロッパ構造主義言語学の伝統は、彼の後継者たちによって今日まで発展し、継承されてきた。彼らは記号論を理論的な基盤として共有しつつも、言語の本質を研究する必要から、程度の差こそあれ、その基軸を *langue* から *parole* へ拡張させていった。結果として、*langue* は「静的で単一の体系」としての側面にとどまらず、「動的で、重層構造を成す可変的な体系」としての姿を見せ始める。また、*context* の中で文化的・社会的な機能を担う意味のまとまりとしての *parole* は *text* と等価値になり、実際の言語使用によって顕現した *text* を meaningful (and/or functional) なものにする *context* への関心から、ジャンル分析 (genre analysis)、テキスト言語学 (text linguistics)、談話分析 (discourse analysis) へと発展してゆく。また、文化的・社会的な機能への関心は、協調の原理 (co-operative principle)、丁寧さ (politeness)、発話行為 (speech act) などとともに、語用論 (pragmatics) に集約される。

最後に、科学として成立することが言語学の発展にとって必要十分条件であると認めるのなら、既存の科学に倣うのではなく、人間科学としての「認識学 (Epistemology)」というものを構想すべき段階にきているのではないかと思われる。それは、Saussure の記号論を基盤としてヨーロッパ構造主義言語学の伝統を継承し、機能主義言語学の方向性を踏襲するとともに、社会・文化の創造者としての人間が言語記号に主体的にかかわることを受容するものである。こうした動向は、すでに認知言語学の理論的な基盤 (の一部) として (断片的ではあるが) 確立している。それらを再構築し、言語学が認識学へと転換することが期待されている。この点については、稿を改めて議論したい。

注

- 1) 単なる先行研究ではなく、同時代における研究のモデルとなるもの。即ち、パラダイム。
- 2) Saussure の記号論については、拙稿、高野 (2010) に基づいている。
- 3) Saussure の『講義』は彼自身の手で著されたものではなく、彼の講義を受けた数名の弟子たちが自分たちのノートをもとに出版したものであった。『講義』の成立事情は、丸山 (2008)、高野 (2010) を参照。
- 4) 認識の対象を構成している意味の要素や成分 (components)。 cf. componential analysis
- 5) 心理学が物理学や化学の思考法を取り入れた要素主義の方法。物質は分子や原子のような要素から成り立つとする自然科学の方法に倣い、心的活動を感覚や心象などの要素に分解し、それらの要素を時間的・空間的に再結合することで、全体の知覚経験が得られるという仮定に基づいている。 cf. 構成性の原理
- 6) 心理学の用語で、全体は部分の寄せ集めではなく、それらの総和以上の体制化された全体的構造を指す概念。(広辞苑)
- 7) 個別言語を想起されるために用いた記号の体系が、フランス語では形式 (une forme) と表現されている。そのため、「意味」の対立概念である「表現形式」と混同され、誤解を招くことがある。 cf. idea (Plato), eidos/form (Aristotle)
- 8) 後述のロンドン学派では「社会的・文化的な意味」と呼ばれるもので、特定の状況において発言する機能のこと。「誰かと言葉を交わして何かを伝える」とか、「誰かに何かを伝えるために文字を書く」という行為は、人間にとってはさほど自由な行動ではない。なぜなら、実際の言語使用というものは、その社会・文化において期待されているようなやり方で言語記号を構造化させなければならないという制約が伴うからである。
- 9) 諸言語の音韻構造、文法構造、意味構造は、それら諸言語がはたらく社会で、それら諸言語が遂行しなければならないもろもろの機能によって決定される。(近藤 訳 1987, p. 246)
- 10) 事態把握。認知言語学的重要な原理の一つで、人間は自分の置かれた立場や状況から周辺の事態を解釈しているので、言語使用によって客観的な世界とは異なる「環境世界」を形成しているという考え方。生態心理学は、人間には周辺の環境 (変化) を通じて、自己の状況を理解するメカニズムが備わっているという考え方もある。cf. エコロジカル・セルフ
- 11) Halliday (1978) からの引用は、前段が Bühler (1934 年出版のドイツ語版) に限定されたものであったが、後半は Malinowski (1923) を含めたものになっているため、…both these views という複数形になっている。
- 12) 呼びかけの語句は、間投詞のように、単独に、また、文や他の部分と直接の文法的関係なしに用いられる。…古い時代、サンスクリットをはじめ、ギリシア語、ラテン語などには、呼格を区別する語形があり、…呼格で表現されていたからである。(石橋 編 1973, p.41)
- 13) 典型的な例としては、'Do you know what I mean?'や'I don't follow you.'などがある。(Jakobson 1987, p.66)
- 14) 言語類型論の研究が進み、欧米の「dialogue 型」言語のコミュニケーションモデルと、日本語のように「monologue 型」言語のそれが、必ずしも、同一のものではないということが明らかにされつつある。この議論において想定されているのは英語に限られ、日本語のような言語では同じ展開ができない。
- 15) G は Gestalt を表している。

参考文献

- [1] 朝妻恵理子 (2009) 「ロマン・ヤコブソンのコミュニケーション論～言語の「転移」～」『スラヴ研究/北海道大学スラヴ研究センター 編』（第 56 号, pp.197-213）
- [2] 池上嘉彦 (1975) 『意味論』大修館
- [3] 石橋幸太郎 編 (1973) 『現代英語学辞典』成美堂
- [4] 石橋幸太郎 訳 (2001) 『新版 意味の意味』新泉社
- [5] 大束百合子 (1962) 「J. R. Firth の学説～特に 'context of situation' と 'prosodic analysis' について～」『言語研究/日本言語学会 編』（第 41 号, pp.14-27）
- [6] 興津達郎 (1976) 『言語学大系 14 言語学史』大修館
- [7] 川上誓作 (1996) 『認知言語学の基礎』研究社
- [8] 川本茂雄 編 (1985) 『ローマン・ヤーコブソン選集 3：詩学』大修館
- [9] 言語編集部 (2001) 『言語（別冊）言語の 20 世紀 101 人』第 30 巻、第 3 号、大修館
- [10] 近藤達夫 訳 (1987) 『言語と言語学』岩波書店
- [11] 澤田治美 編 (2012) 『ひつじ意味論講座 6 意味とコンテクスト』ひつじ書房
- [12] 高野秀之 (2009) 「言語学史概論－認知革命が起こるまで－」『嘉悦大学研究論集』（通巻 95 号 pp.77-99）
- [13] 高野秀之 (2010) 「ソシュール再考－言語研究史における評価の妥当性を問い直す－」『嘉悦大学研究論集』（通巻 97 号 pp.47-73）
- [14] 高野秀之 (2012) 「生成文法入門－言語の本質を捉える経験科学の方法－」『嘉悦大学研究論集』（通巻 101 号 pp.3-38）
- [15] 服部四郎 編 (1978) 『ローマン・ヤーコブソン選集 2：言語と言語科学』大修館
- [16] 服部四郎 編 (1986) 『ローマン・ヤーコブソン選集 1：言語の分析』大修館
- [17] 増田義郎 訳 (2010) 『西太平洋の遠洋航海者：メラネシアのニュー・ギニア諸島における、住民たちの事業と冒険の報告』Malinowski, B. (1922) *Argonauts of the Western Pacific*, Routledge & Keagan Paul
- [18] 丸山圭三郎 (2008) 『言葉とは何か』ちくま文芸文庫
- [19] 渡辺昇一、ほか訳 (1986) 『レトリックと人生』大修館
- [1] Baskin, W. (1959) *Course in General Linguistics*, Philosophical Library, N.Y. translated in English from Saussure, F. (1916) *Cours de Linguistique Generale*, Payot
- [2] Bühler, K. (2011) *Theory of Language: The representational function of language*, John Benjamins, U.K.
- [3] Butler, C. (1985) *Systemic Linguistic Theory and Applications*, Batsford, U.K.
- [4] Halliday, M. A. K (1978) *Language as social semiotics: The social interpretation of language and meaning*, Edward Arnold, U.K.
- [5] Halliday, M. A. K (1985) *An Introduction to Functional Grammar*, Arnold, U.K.
- [6] Halliday and Hassan (1976) *Cohesion in English*, Longman, U.K.
- [7] Halliday and Hassan (1989) *Language, context, and text: aspects of language in a social-semiotic perspective*, OUP, U.K.
- [8] Jakobson, R (1987) 'Linguistics and Poetics' in *Language in Literature*, Belknap

- [9] Lakoff and Johnson (1980) *Metaphors We Live By*, The University of Chicago Press
- [10] Levinson, S. (1983) *Pragmatics*, CUP, U.K.
- [11] Lyons, J. (1966) 'Firth's Theory of Meaning', in Bazell et al (ed.) (1966) *In Memory of J. R. Firth* (pp.288-302), Longman's Linguistic Library, Longmans, U.K.
- [12] Lyons, J. (1977) *Semantics (Volume 1)*, Cambridge University Press, U.K.
- [13] Lyons, J. (1977) *Semantics (Volume 2)*, Cambridge University Press, U.K.
- [14] Lyons, J. (1981) *Language and Linguistics: An Introduction*, CUP, U.K.
- [15] Malinowski, B (1923) 'The Problem of meaning in primitive language', (Supplement 1) in Ogden, C. K. and Richards, I. A. (1923) *The Meaning of Meaning (3rd edition)*, (pp.296-336), International Library of Philosophy, Psychology and Scientific Method, Keagan Paul, U.K.
- [16] Webster, J. (2003) *The Collected Works of M.A.K. Halliday (Volume 3) On Language and Linguistics*, Continuum, U.K.

(平成25年6月19日受付、平成25年7月19日再受付)